

小ねこはなにを知ったか

小川未明

青空文庫

親^{おや}たちは、生^いき物^{もの}を飼^かうのは、責^{せき}任^{にん}があるから、なるだけ、犬^{いぬ}やねこを飼^かうのは、避^さけたいと思^{おも}っていました。けれど、子^こ供^{ども}たちは、日^ひごろから、犬^{いぬ}でも、ねこでも、なにかひとつ飼^かってくださいますかといっていました。

ちようど、そのころ、近^{きん}所^{じよ}でかわいらしいねこの子^こが産^うまれたので、それを見^みてきた男^{おとこ}の子^こは、これを姉^{ねえ}さんや、小^{ちい}さい兄^{にい}さんに話^{はな}したので、三^{さん}人は熱^{ねつ}心^{しん}に、お母^{かあ}さんのとこへいって、ねこの子^こをもらってきてもいいでしょうと頼^{たの}んだのであります。

お母^{かあ}さんは、下^{した}を向^むいて、仕^し事^{ごと}をしなから、どう答^{こた}えていいものかと、しばらく考^{かん}えていられましたが、

「お父^{とう}さんがいいとおっしゃったら、飼^かってもいいが、おまえさんたちに、その世^せ話^わができませんか。なかなか手^てのかかるものですよ。」と答^{こた}えられました。

これを聞^きくと、子^こ供^{ども}たちは、もしや、お母^{かあ}さんに、頭^{あたま}から、いけないといわれればそれまでだと思^{おも}っていたのが、こうやさしくいわれると、半^{はん}分^{ぶん}は、もはや、自^じ分^{ぶん}たちの願^{ねが}いがかんたように思^{おも}われて、三^{さん}人^{にん}の顔^{かお}は、にこにことして輝^{かが}きました。

「ねこの世^せ話^わなんか、できますとも。だって、あんなにかわいらしいんだもの。」と、い

ちばん末すえの男おとこの子こは、叫さけびました。

「お父とうさんに、お願ねがいして、いいといたら、飼かつて下さいね。」と、兄あにのほうがい
いました。

「おお、うれしい。」と、姉あねも、いつしよになつて、喜よろこびました。

三人にんの姉きょうだい弟あには、お父とうさんの帰かえりを待まっていました。そして、どうしても頼たのんで、そ
れを許ゆるしてもらわなければならぬときめていました。

「三人にんで、その世話せわができるなら、飼かつてもいいが、おまえたちにできるかね。」と、お
父とうさんは、笑わらつていわれました。

「できます。」と、姉きょうだい弟あには、答こたえて、とうとうかわいらしいねこの子こを、近所きんじよから
もらつてきました。

小ねこは、同おなじ母親ははおやの腹はらから、いつしよに生うまれた兄きょうだい弟あにと別わかれて、この家うちにきて、
こうして、長ながく養やしなわれることとなつたのであります。しかし、小ねこにとつては、それ
が、兄きょうだい弟あにと永えい久きゆうの別わかれであつたことはわかりませんでした。三人にんの姉きょうだい弟あには珍めづら
しがたつて、小ねこを下したに置おきません。小ねこもまた、みんなから別わかれてきたといふ悲かなしみ
を忘わすれて、はね上がったたり、飛とびついたりして、お嬢じようさんや、坊ぼつちゃんたちと遊あそんだので

あります。

三人は、自分たちが食べる前に、小ねこにご飯を造つてやりました。こんなふうには、小ねこがこの家へきてから、にわかには、家内じゅうが陽気になつて、はや幾日か過ぎたのであります。そのうちに、小ねこは、いつまでも子供でなかつた。そして、もはや、いままでのように、はねたり、飛び上がったたりして遊ばなくなりました。

ちようど、この時分から、三人は、ねこのめんどろを見ることが、だんだんうるさくなつたのでした。

「姉さん、ねこにご飯をおやりよ。」と、弟がいいいますと、

「あら、ずるいわ。こんどは、私の番ではないわ。おまえの番じゃないの？」と、姉さんはいいました。

ねこは、また、ねこで、だんだん横着になつてきました。鯉節をたくさんかけなければ、ただ香いを嗅いだばかりで食べようともしません。そうでなければ、鯉節のところばかり拾つて、白いご飯のところは、残してしまいます。

「お母さん、うちのねこは、ご飯を食べませんよ。」と、子供たちはいいました。すると、お母さんは、仕事をしながら、

「しんせつにしてやらないからですよ。鰹節をたくさんかけてやれば、お腹がすいてい
るのなら、食べないことはありません。」といわれました。

みんなは、そうかと思いましたが、それで、こんどは、鰹節をたくさん削って、かけて
やりました。ねこは、鰹節のかかっているとこころだけ食べて、やはり、みんなは食べま
せんでした。

「お母さん、ねこは、鰹節をたくさんかけてやっても、ご飯を食べませんよ。」と、子
供たちはいいました。すると、お母さんは、

「ご飯のいれ物が汚いからでしょう。よく洗ってやらなければ、ねこだって食べませんよ
。」といわれました。

三人は、そうかと思いましたが、それで、こんどは、よくいれ物を洗って、ご飯をおいし
く造ってやりました。けれど、ねこは、やはり、ご飯を食べませんでした。

そのうちに、ねこは、生魚より食べないことが、みんなにわかったのです。三人
の子供たちは、自分たちが、父母にねこの世話をすることを誓って、ねこを飼ったことを
覚えていたから、できるだけの世話をしたのでした。そして、ねこがご飯を食べないのは、
まったく自分たちのせいではなく、ねこがぜいたくだからだということがわかりますと、三

人の子供たちは、ねこを憎らしく思ったことに、無理もなかったのです。

「わたしは、もう、あんなねこに、ご飯なんかやらないわ。」と、姉さんがいいました。

「僕だって、いやだ。」と、弟がいいました。

すると、末の弟が、二人の言葉に憤慨をして、

「だれもご飯をやらなければ、死んじまうじゃないか？ そんなら、僕がやるよ。」といいました。

こうして、ねこは、みんなから、きらわれるようになったのです。

そればかりではありません。ねこは、いくらしかられても、ふすまで爪を磨いだり、障子を破つたりすることをやめなかつたのです。そして、ときどきは、血だらけになつたねずみをくわえて家へ上がつてきたのです。三人の子供たちは、いまようやく、お母さんや、お父さんが、生き物を飼うことは、骨のおれるものだといわれたことがわかつたのです。

「ねこをどこかへやってしまおう。」

「だれか、もらつてくれないだろうかね。」

「こんなに大きくなつて、もらうものがあるものか」

「捨てればいいや。」

三人の子供たちは、こんな話をしていました。小ねこが、この家へもらわれてきた日のことを考えると、三人の話はたいへんな相違だったのであります。

こんな冗談が、とうとうほんとうになつて、ねこは、ある日、酒屋の小僧の自転車に乗せられて、家からだいふ離れた、さびしい寺の境内へ捨てられました。

いままで、生魚でなければ食べなかつた、ぜいたくなねこは、ふいに、人家もない寂しい場所へ、ただ独り置かれたので、驚いてしまいました。しばらく、あたりを見まわしていましたが、そこはどこであるか、かつて見たことのないところで、見当がつきませんでした。ねこは、急に、悲しくなつたのです。そしてなにとは知らず、体がぶるぶると震えてきました。

夜の空を渡る風が、林に当たつて、怖ろしい音をたてていました。人間の姿も見えなければ、なつかしい家の灯火ももれてきませんでした。ねこは、心細くなつて、悲しい声をあげて泣きながら歩きました。

どこへいっても、暗い林がとり巻いている。そして、自分の泣く声は、空しく、しんとした夜の世界へ吸い取られてしまいました。いつしか、その声もかれてしまった。だんだ

ん腹は空いてきた。ねこは、かつて、こんな悲しいめ、苦しいめに出あったことはなかった。いままでは、空腹ということを知らず、お嬢さんや、坊ちゃんたちにかわいがられていたことを考えると、それは、どんなに幸福なことであつたらうか。

ようやくのことで、ねこは、狭い道の上へ出ました。その道は、どこから、どこへつづいているのかわからなかった。ねこは、しばらくそばの垣根の下にすくんで、なにか、聞きなれた物音でも耳にはいらないかと考え込んでいました。

ちようど、このとき、目の前を白い犬が、うつむきながら通りかかった。ねこは、それを見ると、はつとして驚いた。しかし、瞬間に、その犬は、よく自分の家の勝手もとへきて、自分におどかさされて逃げていった犬だということを知りましたから、ねこは、つい声をかけてみる気になったのでした。

「もし、もし。私ですよ。どういったら、家へ帰れるか教えてくださいますか。」と、ねこはいいました。

白い犬は、振り向いて、近寄ってきました。

「あなたでしたか……。どうして、こんなところへきたのです……。」

「私は、捨てられたのです。」と、ねこは、正直に答えました。

すると、犬は、軽いため息をつきました。

「やはり、あなたにも、そういう運命がめぐってきたんですか。あなたは、いばつていましたね。私が、お腹が減つて、なにか、あなたの食べ残しにでもありつこうと思つて、勝手もとへ顔を出すと、あなたは、飛びつきそうな、怖ろしい剣幕をして、威されたことを忘れはなさないでしょうね。」と、犬は、ねこに向かつて、いいました。

ねこは、こういわれると、さすがに気恥ずかしかつた。

「ほんとうに、私が、悪かつたのです。いま自分が、こうした境遇になつて、空腹を感じていきますと、よく、あのときのあなたに同情ができるのです。もし、もう一度、私が、家へ帰ることができたなら、この後、あなたに対して、あのような冷酷なことは、けつしていたしません……。」といった。

白い犬は、黙つていました。

「あなたは、いつから、家がないのですか？」と、ねこは、たずねました。

「私は、家を失つてから、もう三年になります。私の主人たちは、私を捨ててどこへか移つてゆきました。私は、その当座どんなにか、泣きましたか。いまは、こうした宿無し生活に慣れてしまつたが……。しかし、あなたは、捨てられたのですから、たとえ帰

つても、家へは、いれてくれますまい。」と、犬は答えました。

ねこは、頼りなさと、悲しさと、空腹の苦痛に、ふたたび体を震わしたのです。

「いれられなくてもいいから、どうか、もう一度、私を、家の方へつれて行ってください。そして方に一つ、私が、家に飼われたら、きつと、そのときは、あなたに、ご恩を返しますから……。」と、頼んだのでした。

ちようど、このとき、三人の子供たちは、家で話をしていました。

「ねこは、いまごろどうしたろうね。」

「きつと家へ帰れなくて、うろうろしているだろう。かわいそうだな。」

「そんなら、捨てなければいいに……。。」と、最後に、姉さんはいいました。

「僕が捨てるといったのでない。姉さんが、あんなねこ、捨ててしまえといったのでないか?」と、上の弟は、怒りました。

こんなことで、三人の子供たちがいい争っている、そばで、これを聞いていた、お母さんは、

「もし、今晚にでも、ねこが帰ってきたら、三人は、かわいそうだから、よくめんどろをみてやるんですよ。」といわれました。

「こんど帰つてきたら、お母さん、僕一人でみてやる。」と、末の弟が、答えました。

「それは、もう捨てられはしないわ。」

「ほんとうに、かわいがつてやろうね。」

三人は、そういつて、昨日とは変わつて、どうかして、ねこが帰つてきてくれればいいと心に願つたのでした。

その夜は、ついに、ねこは帰つてきませんでした。そして、二日めの晩に、勝手もどで、ねこの泣く声があったのであります。

「あつ！ ねこが帰つてきた！」といつて、三人は、飛び出しました。

子供たちは、争うようにして、ねこを抱き上げたのでした。

「よく、おまえは帰つてきたな。」

「感心だわね」

末の弟はねこの体にほおずりしました。

「腹が空いているだろう……。」

ねこは、しきりに、泣いて、空腹を訴えていましたから、上の弟は、鰹節を削つてご飯をやりました。ねこは、飛びつくように、喜んで咽喉を鳴らして食べました。

「お母さん、ねこは、鯉節のご飯を喜んで食べますよ。」と、子供たちは、告げました。すると、お母さんは、

「これから、生魚をあまりやらないようにして、なんでも食べる癖をつけなければいけません。あまりわがままにすると、ねこだって、いけなくなってしまうです。」と、いわれたのです。

それから、四、五日すると、白い犬が、勝手もとへ顔を出しました。以前だったら、ねこは、背を丸くして怒りますのですが、そのときは、やさしい声で泣いていました。白い犬は、最初、遠慮するように見えました。ねこの茶わんへ進み寄って、余りのご飯をきれいに食べてしまいました。そして、いつてしまったのです。

この後、幾たびとなく、白い犬はやってきました。そして、ねこのご飯を食べていくのを例としました。

一度捨てられて、苦しみを経験したねこは、そのときの怖ろしさと、頼りなさど、空腹のつらさと、悲しさをいつまでも忘れることができなかった。そして、それを思うたびに、白い犬と約束したことを果たそうとしたのでした。

一日、白い犬がきて、ねこのご飯を食べていました。それを子供たちは見つけました。

白い犬しろいぬは、すぐに物蔭ものかげに隠かくれてしまったが、子供こどもたちは、ねこを捕とらえて、「おまえはばかだね。自分じぶんのご飯はんを食たべられて、じつと見みている奴やつがあるかい。」
といて、ねこの頭あたまをポン、ポン、と打ちました。
これを知しった、白い犬しろいぬは、ねこを氣きの毒どくに思おもいました。
それから、白い犬しろいぬは、この家いえの勝手かたてもとへ影かげを見みせなかつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

初出：「少女倶楽部」

1928（昭和3）年1月

※表題は底本では、「小《こ》ねこはなにを知《し》ったか」となっています。

※初出時の表題は「小猫は何を知ったか」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年2月14日作成

2014年5月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小ねこはなにを知ったか

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>